

2021年度心理相談室ウィーク 講演会報告 「友だち親子を考える」

須藤 春佳

(大学院人間科学研究科 准教授)

はじめに

今年度の心理相談室ウィーク講演会は、コロナ下のため感染防止対策の一環として、オンライン配信による開催となった。この形式による講演会の開催は初の試みとなり、遠隔地等からでも、また自宅からでも視聴できるという意義があったと思われる。実際に参加された方の人数の把握や感想のフィードバックをいただくことが難しい状況ではあったが、学内の関係者の方々には大教室に集まって熱心に聞いていただいたことで、演者としては安心感を持って講演する機会を得ることができた。講演のテーマは昨今の思春期の親子関係を「友だち親子」という切り口から考える内容であった。以下にその概略を示す。

1. 思春期の女性の自分作り —母娘関係と同性友人関係—

思春期から青年期は「第二の分離・個体化」(Blos, 1962)と言われるように、子どもが心理的に親からの分離を行い個としての自己を形成することが重要な発達段階である。この時期は、親に対して秘密を持つことや、同性友人との間で親密な関係を築くことが、心理的な親離れを行う上で重要となる。米国対人関係学派のSullivan (1953) は、この時期の愛他的な親友関係をchumship (チャムシップ) と呼び、この関係がそれ以前の発達の歪みを修復すると同時に、以降の心理発達を促進するという点で重視している。思春期の女性たちが、同性友人との間で好きなものを共有したり、類似の服装を選ぶなど、外見に意識を向けるのも思春期に特有の現象であるが、自分作りを始めるこの時期にとって意味ある現象である。母親の側としても、今まで何でも自分に話してくれていた娘が秘密を持つようになり、自身の知らない世界を友達と共有していることに一抹の

寂しさを感じながらも、娘の成長過程としてそれを見守り、見送る立場となることが自然な展開となる。ところが近年、その傾向に少し変化が起こっているようである。

2. 「友だち親子」とは

近年「友だち親子」という言葉が注目されている。NHK 放送文化研究所 (2012) の、「中学生・高校生の生活と意識調査」によると、悩みごとの相談相手として、過去30年の推移をみると、中高とも友達に相談する人が減り、母親に相談する人が増えているという。親の方は、どういう親でありたいと思うかという質問に対して、「子どもに尊敬されるような権威のある親」と回答した父親は44.3%、母親は19.4%である一方、「何でも話し合える友だちのような親」でありたいと回答した父親は54.2%、母親は79.2%であった。特に母親は子どもに対して厳しく接するのではなく、子どもと友だちのように仲良く対等な関係を築きたいと考える傾向が半数以上を示していた。

こういった複数の指摘やいくつかの調査結果より、親子関係の在り方が、従来に比べて、タテの上下関係からヨコの水平関係へ変化していることが示唆される。いわば、親子関係の友だち化とも言える現象である。親自身が子どもに対して権威的に振舞うことを嫌い、子どもの気持ちを理解する親でありたいという思いがその背景にあるのではないか。

「友だち親子」の出現には歴史的背景があり、高度経済成長期に都市部を中心に進んだ核家族化、少子化、親の高学歴化、富裕化、個人主義化といった現象が挙げられると言う (山登, 2013)。山登によると、高い教育を受け個人主義を身に付けた親は、親子で時間や文化を共有し、共同体の利益より家族のそれを優位に置くようになった。また権威に対して拒否的な態度をとるとともに、自身が子どもに対

して権威的に振る舞うことを嫌うと述べる。このような経緯から親子の距離は近くなり、タテの関係よりヨコの関係が好まれるようになったと結論付けている。

3. 調査結果より

—母娘関係と娘の自尊感情—

須藤（2020）の調査では、青年期の女性を対象に、彼女たちの思春期までの母娘関係が、従来より言われている養育態度として測られる親子関係と、チャムシップのような親友関係に近い関係であった程度について調べ、青年期女性の自尊感情との関連について検討した。その結果、大学生女子が想起する16歳までの母親との関係において、母親が暖かく親しみのある情緒的な関わりを行っていた、自分のことを理解してくれていたと感じられているほど、娘の自尊感情が高い傾向がみられた。同時に、16歳までの母との間で、親友関係の中で展開されるような、日々感じることを共有したり、母親をモデルとするような関係を体験しているほど、自尊感情が高いことが明らかになった。また、従来型の養育態度である「養護」傾向の関わりよりも、母親との間でのチャムシップのような体験をしている傾向の高さの方が、自尊感情への影響が強いことが示されたことから、現代の大学生女子においては、思春期頃に同性友人との間で本来体験するとされてきた関係性を、友人ではなく母親との間で体験することが、自尊感情との関連を示したことが明らかになった。

このような結果の背景には、現代の「親子関係の友だち化」が関係しているのではないかと考えられる。調査結果から、母と娘は、思春期において、分離を目指すのではなく、互いに親密な関係を継続していることがうかがわれ、思春期という不安定な時期に置かれた娘は、分離をめぐって母親との葛藤的な関係を生きるより、親密で良好な関係を結び、母親との一体感をもった関係を築く方が、分離の苦しさを引き受けなくてよいのではないかと考えられる。思春期について詳述している精神分析家のBlos, P（1962）は、「女の子はその思春期を通じて、より強く対象関係で骨折ることになる。事実、遷延されていた母親との苦しい切断が、この時期の主要な課題となるのである」と述べるが、現代の思春期

を生きる女性たちは、母親との一体感を持った関係をつなぐことで「苦しい切断」を回避しているともいえるかもしれない。母親側の不安も大きく、親自身が子の自立を促す方向に働きかけることが難しくなっているのではないと思われる。

4. 親子関係の“友だち化”をめぐる問題

上記のような傾向を受け、現代においては、娘の母親からの第二の分離個体化の体験が遷延化される傾向にあるのではないかと考えられる。土井（2014）は、フラット化しているという現代の親子関係について、「親子の間で本音をぶつけあって関係を深めていくのではなく、現状の関係を円滑に保とうとする圧力が強く働く」と述べ、子どもと対等な関係を築きたいという物分りのよさそうな親たちの態度は、子どもに対して自己承認を求める依存的な心性の裏返しであるとして問題視する。このように、母親自身が娘と心理的に距離を取ることが難しくなっていることには、親自身の抱える不安の存在が影響していることも考えられる。

親子（母娘）の友だち化現象について、母親と娘はそもそも保護養育関係に始まっているという意味で、本来的に対等な関係にはなりえないため、無理が生じるのではない。保護養育関係の中では弱く守られる立場にある娘は、母に守られながら、思春期の自立のプロセスの中で母の生き方やあり方を相対化し、母とは異なる自分を作ることが求められる。では、思春期の娘はどのようにして母からの分離を行うのか？ということについて、演者は以下のような提案を行った。

- ① 母に対する「怒り」を向けること、「怒り」によって母娘の分離が促進されることは織田（1993）が指摘しているが、反抗期を経験するといった直接的な怒りの向け方だけでなく、「内なる母親との対決」の経験を行うことが母からの娘の分離につながる。
- ② よりマイルドな分離の方法として、例えば、母に話す話題と友人に話す話題を使い分ける（進路・恋愛・友人関係）ことや、母が好むものとは違う好みを見出す（ファッション、趣味）こと、娘の進路選択や部活選択といっ

た人生の岐路において、母の思いと娘の思いをそれぞれに尊重し、娘の選択を促すこと。

- ③ 娘が、母の思春期の頃（娘時代）について聞くこと、娘であった母に思いを寄せることにより、一人の娘であった母との出会い直しを行うこと。

どのような形で分離のプロセスが生じるかは母娘のペアにより個々に異なるが、上記の①や②、③によって、娘が母から受けたものを受け継ぎつつも、自分なりの道を見出すことが大事ではないかと思われる。

5. 女性にとっての自分作りとは—母娘関係を越えたものとの出会い—

最後に、英国児童文学作品『思い出のマーニー』を取り上げ、思春期の母からの分離と自分作りについて検討した。思春期の子ども（娘）に求められているのは、母との出会い直し、個人の母を超えた「母なるもの」との出会いや繋がり直しであると考えられる。Jung, C.G. (1959) は、母と娘の絆について、「全ての母は自分の中に娘的な面を持ち、どの娘も自分の娘に母的な側面を持っている。全ての女性は、過去に向かってはその母に繋がり、未来に向かってはその娘に繋がっている」と述べている。またユング派分析家の Rowinsky N.R. (1990) は、家族の生物学的歴史を支えている女性のつながりを「母の系列」と呼び、「母の系列との接触を欠いている女性は魂の喪失者である」と述べる。この物語では、思春期の少女アンナがいかにして母の系列との繋がり直しを行い、生きる力を取り戻していくかが描かれていることについて触れた。

おわりに

現代の「友だち親子」とは、娘が母と、同じ時代の中で「友だち」になる現象を指し、母と娘が同じ時代を同じ目線で共有しようとする状態にある。一方で、娘にとって母親は乗り越える壁であり、異次元の存在であるため、現実の母親と対等な関係を築くことは、いつまでも母娘のカプセルにとどまったままで互いに依存関係となり、自立が阻まれる停滞

するのではないか。思春期の娘にとって求められる母との間での心の作業とは、娘が、母や祖母が生きた「娘時代」と繋がること、すなわち「母の系列」に自身を位置づけ直すことではないか考えられる。最後に、母と娘の間で、異なる時代に思春期を生きた者同士として、その時の状況に置いて様々な思いを感じていた一人の思春期の女性であった者として、親子が向かい合うことが求められているのではないかと考えられる。

文献

- Blos, P. (1962). On adolescence. Free Press, New York.
 (野沢英司 (訳) (1971). 青年期の精神医学 誠信書房.)
- 土井隆義 (2014). 若者たちの“生きづらさ”の正体 (第10回) 友だち親子の落とし穴. 月刊学校教育相談, 28(1), 48-51.
- Jung, C.G. (1959) "The Psychological Aspects of the Kore," Jung and Kerenyi, Essays on a Science of Mythology. Princeton, N.J.: Bolling Series XII, Princeton University Press.
- 織田尚生 (1993). 昔話と夢分析 自分を生きる女性たち 創元社.
- NHK 放送文化研究所 (2012) 「中学生・高校生の生活と意識調査・2012」について. <https://www.nhk.or.jp/bunken/summary/yoron/social/pdf/121228.pdf>.
- Rowinsky, N.R. (1990). Mothers' mothers: the power of grandmother in the psyche of woman. (ed) Connie Zweig. To be a woman: the birth of the conscious feminine. Los Angeles: Jeremy P. Tarcher. (リース・滝 幸子 (訳) 母たちの母: 女性の心 (psyche) の中での祖母の力. 川戸圓・リース・滝・幸子 (訳) (1996). 女性の誕生—女性であること: 意識的な女性性の誕生—. 山王出版)
- 須藤春佳 (2021) 「親子関係の友だち化」の検討—青年期女子の母娘関係と自尊感情を通して—. 神戸女学院大学論集, 第68巻第1号, pp. 77-90.
- Sullivan, H.S. (1953). Conceptions of modern psychiatry. New York: Norton. 中井久夫・山口隆 (共訳) (1976). 現代精神医学の概念. みすず書房.
- 山登敬之 (2013). 「友だち親子」をどうみるか (特集 反抗期を乗り切る). 児童心理, 67(11), 956-960.



2021年度 神戸女学院大学大学院心理相談室ウィーク企画

■講演■

「友だち親子」を考える

思春期は、子どもがそれまでの大きな心の拠り所であった親から心理的に離れ、自分作りを行うことが課題となる時期です。同性友人との間で親密な関係を築いたり、親への反抗を経験するなどして徐々に親離れを行う時期ですが、近年は思春期以降も親密な親子関係が続く、「親子関係の友だち化」とも言えるような現象があるようです。本講演では、現代の思春期の心の発達について、「友だち親子」を切り口に考えてみたいと思います。

日時 2021年8月4日(水) 13:00～14:30

実施形態 オンライン配信 ※予約不要、無料です。

＜参加方法＞ 定額になりましたら、以下のいずれかの方法でご参加ください。

①神戸女学院大学大学院 心理相談室ホームページ-お知らせページ内リンク
心理相談室ウィーク講演会 (<https://www.kobe-c.ac.jp/sinso/index.html>)

②QRコード



講師 須藤 春佳氏 (神戸女学院大学人間科学部准教授)

●講師略歴●

京都大学大学院教育学研究科博士後期課程修了、博士(教育学)、臨床心理士、公認心理師。
京都文教大学臨床心理学部専任講師、京都府スクールカウンセラー、教育相談員等を経て、
現在 神戸女学院大学人間科学部心理・行動科学科准教授。
著書・論文「前青年期の親友関係『チャムシップ』に関する心理臨床学的研究」風間書房など。

■心理相談室無料相談■

日時 2021年7月29日(木)～8月4日(水)
10:00～17:00: 土日除く

場所 神戸女学院大学心理相談室

※心理相談室への予約が必要です。(0798-51-8554)

申し込み期間 2021年7月5日(月)～7月16日(金)
10:00～18:00: 土日除く

主催: 神戸女学院大学大学院心理相談室 (0798-51-8554)